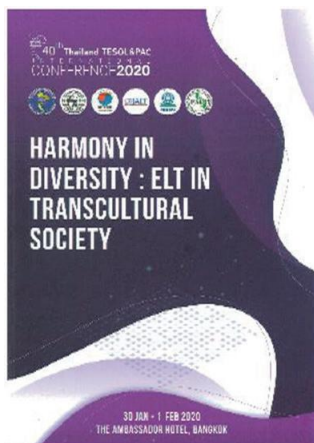




「第40回タイ TESOL & PAC 2020 国際学会」参加報告

呉 春美



本大会の表紙

2020年1月30日から2月1日にかけて、バンコクのアンバサダーホテルにて開催された「40回タイ TESOL & PAC 国際学会2020」に参加した。TESOL(Teaching English to Speakers of Other Languages)は、英語を母語としない学生を対象とした英語教授法を意味し、PAC(Pan-Asian Consortium of Language Teaching Societies)は汎アジア地域における言語教育学会である。タイ、日本、韓国、香港、ベトナム、インド、マレーシアなどのアジア諸国だけでなく、オーストラリアやイギリスなどからの参加者たちで大盛況であった。研究発表は、グローバルイングリッシュ、バイリンガリズム、カリキュラムデザイン、教材開発、テスト評価方法、異文化コミュニケーション、ELTとデジタルリテラシー、コンピューターによるコミュニケーション、言語認識と文学などと多岐にわたる。まさにテーマである「ダイバーシティにおけるハーモニー:異文化を超越した英語教育」を地で行く国際学会であった。

私が担当する「国際ビジネスコミュニケーション」「経済専修英語・講読」「経済専修英語・作文」では、それぞれ異文化理解と国際ビジネス、SDGsと社会問題、ビジネスEメールの書き方や自由英作文に取り組んでいる。人にはビジュアル(視覚)、オーディオ(聴覚)、キネシクス(体感)、内的対話(ことば)を優位とするタイプがあるといい、それらをできるだけ包括した授業

づくりを目指している。たとえば英文を読みながら、即日本語に通訳・翻訳するサイト・トランスレーション、写真や動画の活用、シャドーイングなどがある。またプロジェクト学習(PBL)としての課題レポートをパワーポイントを使って発表することは、プレゼンテーション能力や自信につながるだけでなく、学生同士で学びあうピアメソッドにもなる。

ピアメソッドは、しばしばロシアの心理学者レフ・ヴィゴツキー(L.S. Vygotsky)により提唱された「最近接発達領域(ZPD=Zone of Proximal Development)理論」に関連づけられる。学習者にとって自力ではできないことが、支援者の協力を得ることにより、できるようになる可能性がある。この可能性の領域が、「発達の最近接領域」である。基本的に学校教育では支援者は教師に限定されるが、仲間(ピア)同士との協働作業による教育効果を期待するものである。

英語学習とコンテクストラーニングの組み合わせも、語学を学ぶ目的を考えれば当然だと言えるだろう。その基盤となる「CLIL(Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習)」は、1900年代EU統合により、共通言語となる英語を学ぶ必要性からヨーロッパで提唱された言語習得法である。ヨーロッパでは小学校からさまざまな科目を英語で



国際学会の様子

教えられるようになり、最近ではタイ、インドネシア、ベトナムなど東南アジア諸国での初等教育に導入され、成果をあげているという。日本では本格的に導入されていない。

英語4技能(聞く・読む・話す・書く)を学ぶだけでなく、テーマについての理解を深め、分析力や創造力などあらゆる能力を活用することにより、学びは深まる。私自身イギリス留学時代にCLILとZPDの学び方を体験した。英語が第二外国語ゆえの苦労はあるが、それ以上にそのような学び方は新鮮で、喜びでもあり、学ぼうとするモチベーションにもつながった。教員となった今そのような経験を学生たちと共有したいと思うものの、特に著しく本を読む習慣がなくなった現代において、それは試行錯誤の連続である。

今回の国際学会に参加して気づくことは、海外から紹介されるこのような教育法は、実は日本独自の教育法でもあったのではないだろうかということである。江戸時代の藩校や明治時代の教育である。ピアメソッドに関しては、同年代のグループで学びあうだけでなく、議論も盛んに行われ、また自らが

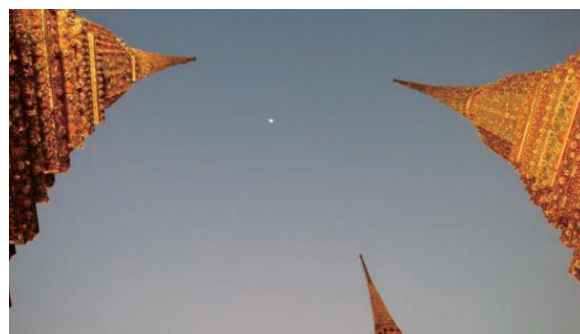
教師となって年下グループにさまざまな教科を教え、体を鍛え、メンターとして指導するという薩摩藩の郷中教育がある。長崎英語伝習所やわずか1年3か月という短期間ででありながら高橋是清



呉先生とKunwongse先生



新渡戸稲造の札幌農学校在学中の英文ノート



バンコク ワット・ポー寺院

により教えられた耐恒寮(佐賀県唐津市)など、日本には多くの効果的な英語教育の実例がある。新渡戸稲造の札幌農学校在学中の英文ノートを前に、いったいそのような教育の土台は何だったのだろうと思いを巡らせる。今回の国際学会では、アジア圏における英語教育、異文化理解、市民教育の一端に触れることができたが、またかつての日本の教育を再認識する機会にもなった。

最後に思いがけない収穫があったのは、タマサート大学(タイ)のKunwongse准教授と知己を得たことである。最終日、バンコク三大寺院であるワット・プラケオ、ワット・アルン、ワット・ポー、そしてタマサート大学を案内して下さり、夕食を共にした。その間ふたりで英語教育の情報や意見交換をしているうちに、お互いの学生たちをオンラインでつなげ、日本とタイの文化紹介から異文化理解を試み、学生たちの共同プロジェクトに発展させようということになった。それは私たち教員の共同プロジェクトであり、来年の第41回の本学会で共同発表(中間報告)を目指して今年度前期から始動するはずだったが、新型コロナ拡大により、延期を余儀なくされた。しかし将来このプロジェクトを本国際会議のテーマでもある「ダイバーシティにおけるハーモニー:異文化を超越したELT(英語教育)」への第一歩にしたいと考えている。

(所員 神奈川大学 経済学部特任教授)